別紙様式３

平成　20　年度　博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名（注：学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること）

精神科訪問看護師が捉える再発重症化予測因子の検討

学位の種類：　修士（　看護学　）
人間健康科学研究科　博士前期課程 人間健康科学専攻　看護科学系
学修番号 07894603
氏　名：森田　牧子
（指導教員名：山村　礎　准教授）

目的：本研究は、統合失調症の再発重症化予防において、精神科訪問看護師はその役割を担うことが出来るかの可否の検討を目的とした。再発重症化の予測因子を特定するために、重症化指標となる抗精神病薬処方量と医師による機能の全体的評価尺度(GAF)と、先行研究で明らかとされた看護師の捉える利用者に生じた変化や、利用者の社会生活評価尺度(LASMI)、基本属性、病歴との関連を検証した。

方法：都内３施設の統合失調症を有する訪問看護利用者 33 名を対象事例とした。33 名は、病院から退院し地域で安定した生活を送っていた時期があり、再発により医師の処方変更を要する状態悪化が起きた利用者であった。そして、対象 33 事例の担当医 12 名、担当看護師 19 名に、自記式調査を用いて実施した。調査内容は 33 事例に関する GAF、LASMI、再発前の変化件数リスト、そして基本属性と病歴からなる。GAF は担当医師に再発前と再発後の 2 時点を想起してもらい、その評価を尋ねた。変化件数リストは、再発前に出現した変化件数を明らかにするものであった。LASMI は、調査時点より直近 1 ヶ月の利用者の状態を想起してもらい評価を尋ねた。基本属性と病歴は看護記録より研究者が収集した。

分析：再発後の重症化の予測因子を特定するために、重症化指標として、「再発前後の抗精神病薬内服量」「再発後の抗精神病薬内服量」と「前後 GAF 点数差」「再発後 GAF 値」の変数を用いた。そして重症化予測因子の要因として、看護師の捉える利用者に生じた変化 4 領域(「言語的・生活行動変化」、「非言語的・生活行動変化」、「言語的・生活リズム変化」、「非言語的・生活リズム変化」)の各変化件数と、LASMI、基本属性と病歴を変数として用いた。重症化に関連する要因を探索するために、悪化群と軽症群の 2 群比較を行った。更に、ロジスティック回帰分析を行い悪化に寄与する変数を特定した。

結果：統合失調症の再発重症化予防において、重症化の予測因子は「非言語的・生活行動変化」、「生活リズム変化」、「非言語的変化」、LASMI「自己認識」であった。重症化の指標とした GAF と処方薬はいずれも医師による重症度判断であり、その指標の予測因子として、看護師の捉えた利用者の変化件数が有意に相関した。看護師の判断は医師による重症度判断と同じ一定の基準を持つことが示された。訪問看護は利用者の日常生活支援に重点を置いているが、非言語的な変化を長期間観察することが再発予防・再発重症化予防となると考える。これより、再発重症化の予測因子を訪問看護師の捉える変化の中や評価から特定することが出来、精神科訪問看護師がその役割を担うことが出来ることが示唆された。